

2024（令和6）年度

---

---

# 小論文

---

---

10：30～12：10

教養学部

学校教育学科

一般選抜(中期日程)

## 注意事項

1. 合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 解答用紙は2枚あります。1枚は下書きに、1枚は清書に使いなさい。  
提出は1枚だけです。
3. 合図があったら、解答用紙の指定欄に受験番号を記入しなさい。
4. 落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れの箇所を見いだした場合はすみやかに申し出なさい。
5. この冊子は、持ち帰ってさしつかえありません。
6. 試験終了の合図があったら、筆記用具をただちに置いて下さい。

課題文を読んで、以下の設問に答えなさい。

### 課題文

スポーツの場合も文字を書く場合も、練習を積み重ねることによって変わるのには、私たち自身のからだの使い方です。つまり、いずれの場合もある身体技法が獲得されているわけです。

たとえば、新しい言語を学ぶときのことを想像してみてください。生まれてはじめて「A」という文字を書くとき、その一筆一筆を目で見ても、お手本と同じかを確認しながら、手を動かして書くはずですが、それを一度からだ覚えてしまえば、私たちは、そこまで集中して「A」の文字を見なくとも、場合によってはよそ見をしながらでもその文字を書けてしまうようになります。考え事をしながら歩いても目的地にたどり着けることも、これと似ています。

なぜそのようなことができるのかと言えば、それは、私たちのからだが変わり、新しい身体技法を獲得したからです。このことは、スポーツの運動でもまったく同じです。たとえば、はじめてバスケットボールでドリブルをするとき、私たちはそのボールを一所懸命に見て、なんとか自分の手でボールをコントロールしようとしています。しかし、そんなことをしているプロのバスケットボール選手はいません。なぜなら、彼らはその練習を繰り返すことによって、自分のからだで、その動きを覚えているからです。だから、彼らはボールを見ずにドリブルをしたりパスをしたりできるわけです。

もちろん、練習によってからだが変わり、それによってある運動に慣れていくという過程は、決してスポーツに限られません。楽器の演奏でも、漫画を描くことでも、そして歩くことについても、まったく同じです。大切なので繰り返しますが、それらの運動ができるようになるとは、一つの身体技法を獲得することであり、それはほかでもなく、私たち自身のからだが変わるといふことなのです。

この「からだが変わる」ということをさらに理解するために、階段とエレベーターの例を挙げて考えてみます。次のような思考実験です。

みなさんは今、電車に乗ろうとして、ちょうど駅に着いたところです。改札は一階ですがホームは二階にあります。改札を通過したみなさんには、ホームに行く手段が三つあります。階段で上がる、エスカレーターで上がる、エレベーターで上がる、の三つです。さて、みなさんはどれを選びますか？

「そんなのそのときの気分でしょ？」という意見には同意しませんが、ここで考えてみたいことは、その「気分」とは一体何かという点です。たとえば、次の日に楽しい旅行を控えていてルンルンの気分の日には、階段を使うかもしれません。反対に、部活や勉強を一日中頑張つてへトへトな気分ときは、エスカレーターや、場合によってはエレベーターを使うかもしれません。

これらの例が示しているのは、多くの場合、私たちはそのときどきのいろいろな気分に基づいて、自分の意志で階段やエレベーターを選択している、ということなのです。確かに、そのように考えることが一般的だと思いますし、実際にそうしていることも事実です。しかし、それだけでは、現実の捉え方として不十分であると言わなければなりません。一体、なぜなのでしょうか。

問題は、「からだ」に関する視点が抜け落ちていることにあります。つまり、本当は、私たちが自分の意志で階段かエレベーターかという選択をする前提に、私たち自身のからだが存在している、ということなのです。

たとえばみなさんがアキレス腱を切つてしまい、ギプスを装着して両手に松葉杖を使っていた場合、みなさんは、階段という選択肢を選ぶことはできません。いえ、もつと正確に言えば、そもそもその選択肢自体が存在していないのです。このことは、自力で階段を登ることのできない赤ちゃんの場合も同様です。つまり、私たちは自らのからだの在り方によって、思考や判断に大きな影響を受けています。言い換えると、自分のからだの在り方が、私たちが物事を考えたり感じたりすることの枠組みになっているということなのです。

このように考えると、私たちのからだの重要性が浮かび上がってきます。なぜなら、私たちのモノの感じ方や見方、さらには考え方が、もし私たち自身のからだの在り方に影響を受けているのだとすると、それは同時に、次のことを意味するからです。すなわち、私たちのからだが変わると、私たちの経験する世界も変わる、ということです。

ここで言う「世界」は、地図や地球儀に描いてあるものを意味しているわけではありません。そうではなく、私たちが毎日を生き

ているなかで身の回りに経験している具体的な物事を、ここでは世界と呼んでいます。たとえば、学校も家庭も世界ですし、先生や友達、さらには家族も、その世界の一部だと言えます。重要なことは、その世界はみなさん一人ひとりによってリアルに経験されている、という点です。だからこそ、みなさんのからだが変わると、みなさんが経験することのできる世界も変わるのです。

先ほどの階段とエレベーターの例で言えば、自力で歩けるようになった赤ちゃんが、歩くという運動にさらに習熟し、階段を登ることのできるからだに変わることによって、その子の世界に階段という選択肢がはじめて現れます。逆に言えば、それまでその子の世界には、階段は存在しておらず、それは大人に抱っこやおんぶとかをしてもらって登る対象でしかなかったわけです。

この例は、運動と私たちとの関係について、一つの重要なことを教えてくれます。それは、私たちのからだがある運動のできるからだに変わることによって、私たちの経験する世界がどんどん豊かになっていくということです。このような変化は、赤ちゃんがハイハイから歩けるようになることや、落書きが文字に変わること、そして、ボール投げがキャッチボールに変わること、すべてにおいて起きています。大切なので繰り返しますが、運動ができるようになることは、決してスポーツがうまくなることだけを意味しているわけではなく、私たち自身の経験できる世界を豊かにすることなのです。

出典：坂本拓弥『体育がきらい』(二〇二三年 筑摩書房)ただし一部を改変した。

**設問一** 傍線部アで、筆者は「私たちが自分の意志で階段かエレベーターかという選択をする前提に、私たち自身のからだが存在している」と述べていますが、それはどういうことですか。課題文に即して、二〇〇字以内で説明しなさい。

**設問二** 傍線部イで、筆者は「私たちのからだが変わると、私たちの経験する世界も変わる」と述べていますが、あなたはこれについて、どう考えますか。課題文を踏まえながら、あなたの考えを、自分の体験や見聞を交えて八〇〇字以内で述べなさい。